
essais こころみ 2018年11月

2018年11月1日（木） 秋晴れ

今朝はこの秋一番の冷え込み。でもよく晴れているから、日中は温かくなると思う。このまま週末にかけては気温は低め、でも来週はまた日中24度ぐらいになるとか。今年は暖冬の予報。

- 『偶然性と運命』の私的経験則①-はじめに

『偶然性と運命』（木田元 岩波新書）は2001年4月に出版された。いま書きながら気づいた。独立した1991年からちょうど10年の時だ。

創業・起業する人たちにいつも話しているように、最初の10年は誰にとってもドラマティックな序章になる。まずは10年続いたということが不思議にも思える。数々の出来事、出会い、そして分かれがあったからまた、続いたということがある。

そんなこんなことに想いをはせる頃が最初10年目あたり。そのタイミングで『偶然性と運命』が出たから、読む気になったのだと思う。

著者の哲学的思索を後追いしながら、結局のところ、答えは自分の中にあるなあと感じたものだ。自分をとりまく外の世界に呼応して、何をどう考え、動くか。それが「偶然」を生み、「運命」を綴る。

最初の10年が過ぎてからも、「偶然」は時々生まれ、今に至っているが、一度それらを書き出して一覧にしようと思いついたのが2007年の夏だった。ファイルもプリントアウトもちゃんと残してある。

記録はしていないけど、ずっと記憶していること。エクセルにまずフォーマットを作り、入力していった。あがったのは、この段階で26件。いま見返しても、なかなか呻る。

それからさらに11年。試しに『偶然性と運命』の経験則を図るとしよう。うまくいくかどうかはわからないけど、やってみる値打ちはある。わたし自身のためにも、これから自分の道を進む誰かのために。

2018年11月3日（土） 大阪YWCA創立100周年記念

午前11時から中之島のリーガロイヤルで式典があった。今回は会員のみなさんも、裏方ではなく、表に出て全体で祝いたいという声に応じてホテルでの開催になったとのこと。

第一部は記念礼拝とミニコンサート、二部が祝会。出席者のみなさんのいぶし銀の輝きが会場全体を包み、穏やかで良質な空気が流れていた式典でした。その場に居られたことが仕合せ。



大阪YWCAの歴史を画像でふり返る中で、わたしの姿もチラッと映っていました。

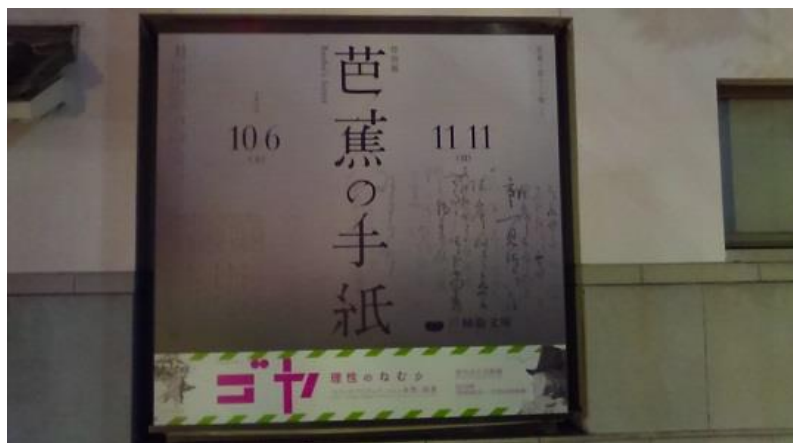


2018年11月8日（木） 八尾市男女共同参画センター「すみれ」

起業講座の受講者のみなさんのフェスタ。昨年より広い会場でのびのび実践。一種のテストマーケティング。いろいろと気づく点多かった様子です。



2018年11月10日（土） 伊丹 アイホールで知人の公演（『808ダイエット』）があった。午後2時の部を観て、友人の仕事が終わるの待つ間に美術館で企画展などを観た。『芭蕉の手紙』は見ごたえがあった。時空を超え、芭蕉を身近に感じたのだった。



2018年11月12日（月） 朝一番は晴

先週は11月とは思えない暖かさ、否、日中は暑さが続いた。週が明けて、今日は少し気温は低い。北海道はまだ雪が降っていないらしく、記録を更新しようとのこと。夏は異常な暑さだった。この冬は異常な暖かさになる？

- 『偶然性と運命』の私的経験則②-タイミング

* 『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

偶然と思えることが続くとしたら人生が動き始めているということ。起業の相談などでよくそう言っている。相談では相手にいろいろなことを問うことになるが、答えの中によく、偶然だれだれと会って、何なにがあって…という話しが出てくる。わたし自身の経験からも、相談者がいまどうという展開に入ろうとしているのか、人ごとながら意気揚々としてくる。

1989年1月、昭和から平成になったこの年は、今から思えば、自分の人生後半を決定づける年だった。1月末で勤めていた会社を辞め、むこう1年は仕事をしないと決めていた。

会社にはよくしてもらっていたが、妙に安定すると、“このままではだめだ…”と思うタチであった。誰かに教えてもらったわけではないけど、安定から新しいものは生まれないと経験的に学んでいたのかもしれない。

辞めて数日も経っていなかった。朝のんびり新聞を読んでいて、目にとまった広告があった。社会人対象の新設コースの入学募集案内。大阪YWCA専門学校が外資系企業への転職などを目指す女性たちのための全日1年課程を開講するという。

全日1年というのがいい。学校は社会的に信頼のおかそうなところである。規模も、大きくなく小さくなく。何より、会社を辞めたタイミングでこの広告が目にとまり、気になり、よく見たのであるから、“これはまず直接詳細を聞きに行こう、応募資料をもらいに行こう…”。

外資への転職は考えていなかったが、カリキュラムはおもしろそうだった。講師陣に元新聞記者、現役の外国人フリージャーナリストらがいて、多様であった。試験は作文と面接だけだったと思う。文章はうまく書けなかったが、追って合格通知が届いた。

もしこの学校へ入らずに別なカタチで1年を過ごしていたなら、独立には至らなかったと思う。タイミングに意味を感じて繋いだ、新しい自分の流れ、自流である。物語りはここから始まる

2018年11月15日（木）

仕事で堺東へいった。合間に初めて堺市役所へ入った。高層棟に展望ロビーがあるので、上がってみた。なかなかいい眺望であった。



2018年11月18日（土）

秋は季節がいいので、行事や催しが多い。この日はクレオ中央館のフェスタがあり、「女性チャレンジ応援拠点」のミニサロン『読んだもつもりの本もちより会』。この「本もちより会」は5回目、わたしは何と皆勤。今回は『皮膚は考える』を持っていった。いつも必ず初めての参加者がいるが、初対面でもすぐに打ち解けて、皆で話がはずむのは、好みは違ってても本好きが集うからだ。年明けに第6回がある。次は何を持っていこうか。



2018年11月19日（月） 朝は雨

今年まだ暖房を出していない。今朝の雨が上がれば、夜は寒くなるらしいから、そろそろ出番か。今しがた「ens」の次回ランチミーティングの日程を更新して、“次はもう新年か…”。今年もあと42日。

- 『偶然性と運命』の私的経験則③-タイムラグ

* 『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

『どうして転職することばかり考えるのか、どうして自分でマネジメントすることを考えないのか？』。

1989年4月入学した大阪YWCA専門学校の社会人対象のコース。各科目の最初の授業で入別々の外国人講師が、同じように聞いてきた。入学動機を受講者皆が同じように「外資へ転職するため」と答えたことへの反応だった。

自分でマネジメント!? 受講者皆、目が点になった。思わず全員が言い返した、「独立して仕事するなんて、そんな簡単なことじゃありません!」。まだ終身雇用が生きていた時代、簡単なことじゃない以前に、働き方の選択肢としては特異だった。

でも二人の外国人講師がまた同じように切り返してきた。電話・ファクシミリ、そしてPCがあれば自宅を事務所にいくだけでも独立はできる、要は「頭」だと言った。自分おアイデア、ナレッジ、コンセプト、いろいろな意味をこめて、二人ともそう言ったのだった。

その時の光景は今もよく憶えている。一年半ごとに思い出すことになったから、印象に残ったのだと思う。

1年コースを修了し、1990年に卒業をして、新聞の求人広告に載っていた米国企業へダメ元で応募したら、何と、採用さて、思いがけず外資へ転職することになった。

半官半民のよい会社であった。待遇も社内の雰囲気もよかった。でも5カ月もすぎると、外資も日本企業も、組織に属している限りは変わらないなあと感じ始めていた。

とどめを刺したのは、朝の通勤時にみた光景である。中之島を走る市バスの車内から窓越しにみた元グランドホテル前のワンシーン。ホテルのエントランスのドアが開き、経営者らしき人がオフなのか、出張の合間なのか、カジュアルな服装で颯爽と出てきた。

なぜかそれだけで、とっさに“わたしも向こうへ行かなければ…”と想った。ほんの一瞬の光景ではあるけど、自分の裁量で生きている、働いている感じが眩しかった。すると俄かに1年半前の光景、言葉が甦った。「自分でマネジメント…」、そう、自分でマネジメントすればいい。

まさか時間をおいて、事がこうつながるとは思わなかった。その後も似たようなことはあるし、これからもあるだろうと思う。だからか、見聞きしたことで何か気にとまるような場合は、なぜ気にとまるのだろうと考えるのが習慣になっている。ものごとを長い目でみるようになったのもまたそう。

時間をおいて意味をもつ、言葉、コト、モノ。もう少しみてみよう

2, 018年11月23日（金）

三連休、23日は満月。



2018年11月24日（土）

京都丸太町のシェアホテルRAKUROというところで、第2回 A R T・B I Zがあった。桂高校の伝統野菜研究班を囲んでの交流会であった。高校生たちが育てた九条ネギの試食させてもらい、学外での活動で実践的に社会勉強する高校生たちに、頼もしさ、逞しさを感じた。

ところ、この時期の土日の京都は本当に大変なことになっている。京都駅の地下鉄ホームは人がホームからはみ出しそう。車両は満杯で、ドアを締められず、なかなか出発できない。想像していた以上。平日でも大変な人だから京都から足が遠のいていたが、紅葉も12月に入ってから、北山の植物園ぐらいにしておこうと思った。



2018年11月26日（月） 晴れ

先週の後半から晴れ。三連休は絶好の紅葉見日和だった。京都

- 『偶然性と運命』の私的経験則④- 気になる

* 『偶然性と運命』（木田元 岩波新書2001年4月）

1年半も前に聞いた一言が頭の隅に残っていたから、独立という想いがたぎったのか、それとも、わたしの未来に独立が待ち構えていたから、1年半前の一言に心が妙に反応したのか、さてどちらだろう。

さてどちらだろうと後者まで加えて考えるのは、同じようなことが少なからずあるから。なぜかしらその気になって買ったモノが20数年も後になって家のお守りになったとか、その気になってアプローチしたことが、別の方面から仕事の依頼としてやってきたとか。

もともと何か迷った時には自分の気を量るほうであったから、しだいに＜思い立ったことはやり過ぎさない＞というのが身にそなわった。その際たるものは“事務所を持つ”だったかもしれない。自宅を事務所に独立して、3年が過ぎていた。

苦節は容易に想像できたが、その具体的な中身までは考えなかった。どんな現実が待っているのせよ、もっと自分に試練を与えなければキャパシティーは広がらないとだけは、わかっていたと言える。それにしても、よくぞその気になったもの。

タイミングの背景やタイムラグの間には、状況の変化があり、その応じて、心境の変化がある。ほんの数カ月前には到底その気にならなかったような気が生まれてきて、体もそちらへ動いていく。それらを俯瞰すると、やはり大きな流れがあるように見える。

気象の気流ならぬ、人心の気流？ それに応じて生まれて育ち、またはしぼむ人の環とつながり、生涯のもの語り。考えれば考えるほど、考えることがまだまだいっぱいある『偶然性と運命』。

2018年11月29日（木）

『Hospital Art in Gallery』のついでに奈良散歩

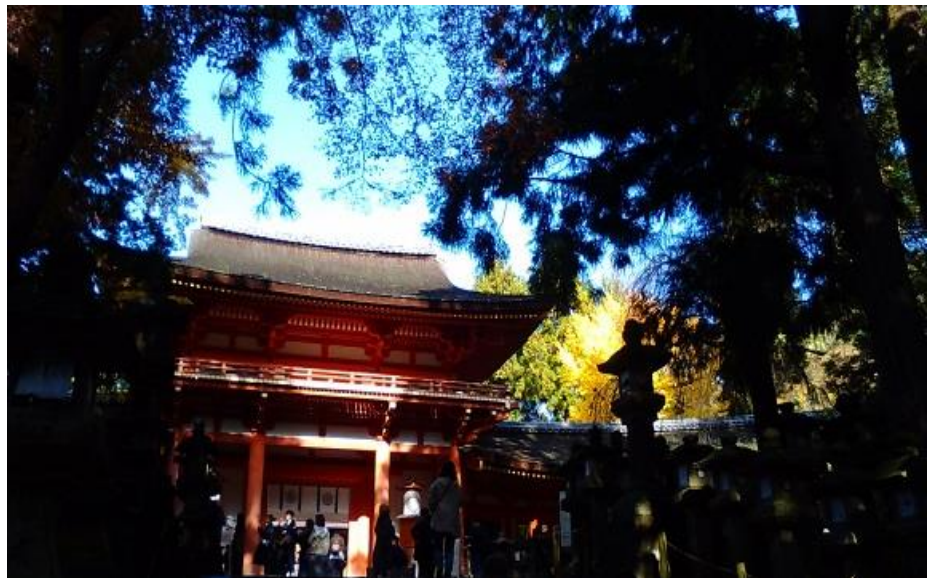
「ひというプロジェクト」が企画プロデュースした展示が奈良のギャラリー「Out of Place」で11月2日から開催されていた。日程は30日まで。奈良へはあまり足をむけていない。よい機会なので、少し散歩することにして、まずは興福寺の国宝館と東金堂を拝観した。ごくごく身近に国宝を拝められる興福寺の懐の深さ、拝観者への信頼感に敬服。



300年ぶりに再建され、一般公開が始まっている「中金堂」。



興福寺のあとは春日大社へ足をのばし、



春日大社から戻り、知人ご夫婦が経営するカフェ&ギャラリー「ならまち村」へ。第一線を退かれ、古民家で始めたライフワーク。3年ぶりぐらいになるし、これまで2度しか行っていないけど、まずはちゃんとお店にたどりつき、ホットコーヒーをいただきながら、ここで「Out of Place」の場所を確認。でもわからず、途中で何度か人に聞いて、やっと見つけた。隣は知る人ぞ知る絵本カフェとのこと。



せっかくだからその絵本カフェへも。30代半ばぐらいのご夫婦が二人がやっているらしい。ちょっと声を聞いてみると、開業からもう9年になるそう。

